九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

濱文庫の中国演劇資料

中里見，敬
九州大学言語文化研究院 ： 准教授 ： 中国文学

https://hdl.handle.net/2324/20033

出版情報：2011-09-24. 九州大学大学院人文科学研究院，朝日カルチャーセンター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

百周年記念事業特別講座
第二期「九大100年　お宝大集合～仙厓さん
もおカイコさんも　全学から発掘」

濱文庫の中国演劇資料

九州大学言語文化研究院
中里見 敬

「濱一衛と京劇」展：濱文庫の中国演劇コレクション

１．はじめに

奥野信太郎は1930年代の北京と京劇を次のように記しています。

北京は静かな美しい町である。槐樹と柳と楡が鬱蒼と茂った町である。夏の頃は合歓の花が淡紅く墻壁のところどころを彩り、空には白い鳩の群が銀粉を撒らしたように輝きわたる。大きな城壁に囲まれたそのなかに、宮殿や並木路や彫像が、整然と左右相対に配置された、すばらしい構想をもった図案だといえば間違ない。夕方になると娘たちは晩香玉（ワンシアンユイ）や茉莉花（モオリイホワ）を形よく結んで胸に飾っては、王府井（ワンフーチン）や北海（ペイハイ）を散歩しはじめる。その姿は実に美しい。(中略)

わたくしは老若男女に拘らず純粋の北京人はその好みに他地方のものの窺知し難い冴えがあると思っている。久しい間の荘麗な宮廷生活が中心となって馴致されたこの町の人たちの嗜好は余りにも繊美であり華奢である。それが料理にあらわされ、手芸にあらわされ、娯楽にあらわされ、その他生活の諸方面に顕然と認められる事は此上もなく北京というところをたのもしく思わせる。

(奥野信太郎「書肆漫歩」,『随筆北京』東京：第一書房，1940；東京：平凡社，1990)

図1–1　1930年代の崇文門と城壁（絵葉書『北平大観』第２輯　濱文庫／追（2008)／49)

男も女も老も若きもただうっとりとして蒼ざめた老生（ラオション）の悲しい唱に耳を傾ける。喉が渇けば熱い香片茶（シアンピエンチヤア）、口がさみしければ舌先で瓜子児（コアヅル）を操る以外、身も心もひたすらに吸引されているのは前方の戯台である。どことなくうっすらと匂ってくる茉莉花（モウリイホワ）や玫瑰花（メイクイホワ）の香と人いきれの臭気とのなかで、胡弓の咽び泣きを繋ぐ銅鑼の咆哮に乗って今や戯舞の上では、「捉放曹」の幕切れ陳宮が睡れる曹操を殺さんとして思い止まり「こはこれわれ陳宮は事をなして差えり。賊に随うべからず。天涯に走らん。落花意あり流水に随い、流水心無くして落花を恋う。」と二簧揺板（アルホワンヤオバン）の唱を終えて下場しようとしている。場内の彼処からも此処からも拍手と懸声がかかる。これはいうまでもなく戯院内の風景である。

(奥野信太郎「三国志演義を中心として」,『随筆北京』東京：第一書房，1940；東京：平凡社，1990)

図1–2　1930年代の前門街のにぎわい（絵葉書『北平大観』第３輯　濱文庫／追（2008)／49)

九州大学教養部・元教授の濱一衛が北京に留学したのは、1934（昭和９）年から1936（昭和11）年の２年間、満洲事変後とはいえ、まだ北京では平穏な生活が営まれていました。濱一衛はその北京で、文豪・周作人邸に下宿しながら、足繁く京劇に通う日々を送り、現在、九州大学附属図書館濱文庫に収められている当時の中国演劇の生の資料を多数収集しました。

濱一衛帰国の翌1937年７月には、盧溝橋事件により日中両国の全面戦争、日本による北京占領が始まり、女形の名優・梅蘭芳は髭を蓄えて香港・上海に隠棲し、京劇の舞台に立つことを拒んだのです。

図1–3　1930年代の東単牌楼大街（絵葉書『北平大観』第２輯　濱文庫／追（2008)／49)

図1–4　1930年代の東四牌楼大街（絵葉書『北平大観』第３輯　濱文庫／追（2008)／49)

奥野信太郎の随筆は、濱一衛が下宿していた当時の周作人邸の様子を次のように伝えています。

周先生の住んでおられる八道湾はその名の示すが如く屈曲した小路の奥である。樹木の多い如何にも文人の住居らしい、そして院子（ユアンツ）のほかに、たっぷりと空地のある閑雅な一廓である。夏ならば蝉時雨、秋ならば落葉の響に気も心も澄むほどの落ちついたところで、南面の客庁西端の椅子で、主人の来出を待つ間、いつも何の音も聞こえないほどの静けさである。

客庁東端の一室は所狭きまでに書架を並べて、古今の書籍が詰っているのだが、間じきりのカアテンで見えないようになっているゆかしさ。だが収めきれない日本や西洋の書物はなお数多く応接対談

の席にも溢れ出ている。すべて整頓されていて乱堆の跡は微塵だにない。

やはり昔ながらの支那住宅である。下には磚（チョアン）を敷きつめて板張りの床ではない。所謂一暗両明の建て方で光線はやや薄暗い。先生は窓を背にして坐られるから、後から外光がさすことになる。そしてその薄暗さのなかで、時々小さな眼鏡のたまが、おちついた話の口調の間々に鋭く光って見える。先生はいつもこうして、やや羞ずかしそうに肩をすぼめて、遠慮深く、それでいて含蓄のある話をされることを常としている。

（奥野信太郎「周作人と銭稲孫」，『随筆北京』東京：第一書房，1940；東京：平凡社，1990；『奥野信太郎随想全集』５ 知友回憶（東京：福武書店，1984）に再録）

今回の展示では、「『濱一衛と京劇』展：濱文庫の中国演劇コレクション」と題して濱一衛が収集した京劇の資料を展示するとともに、中国演劇をこよなく愛した〈戯迷（シーミー）〉学者・濱一衛の業績と人柄にも迫りたいと思います。京劇と濱一衛をとおして、当時の北京の様子を、そして中国と日本の関係をも垣間見ることができるでしょう。

なお、濱一衛が留学していた時期、国民政府は南京を首都とし、北京は北平（ペイピン）と改称されていましたが、本展示ではすべて北京とします。引用文中の歴史的仮名遣いや旧字体は改めましたが、「支那」等の表記は原文のままとします。

図1–5　曲がりくねった八道湾胡同（現在）

図1–6　濱一衛が下宿していた旧周作人邸（現在）

２．京劇とは

2.1. 京劇の歴史

中国の伝統演劇の一つである京劇の起源は意外に新しく1790年とされ、実際には19世紀中葉に中国各地の演劇が融合して、北京で発展したものです。それ以前に盛んだった崑曲に比べて、通俗的で娯楽性に富む点に特徴があります。京劇の全盛期は1920–30年代といわれ、ちょうど濱一衛の北京留学時代と重なります。

2.2. 京劇の特徴

京劇は音楽劇（オペラ）であり、俳優は「唱（うた）・念（せりふ）・做（しぐさ）・打（たちまわり）」によって演じます。役柄は、男性役「生（せい）」・女性役「旦（たん）」・顔に隈取りを描く男性役「浄（じょう）」・道化役「丑（ちゅう）」の四つに大別されます。

舞台装置は机と椅子くらいしかなく質素ですが、京胡（弦楽器）・チャルメラ（管楽器）・ドラ（打楽器）などを使う音楽はにぎやかです。

2.3. 京劇の俳優

昔の京劇は男優のみで演じられ、「旦」も女形の男優が演じましたが、民国期から女優の舞台進出が始まり、新中国では一部の例外を除き「旦」は女優に一本化されました。京劇の俳優・伴奏者の育成は、昔は科班（かはん）と呼ばれる私塾的な俳優養成所で行われ、新中国では戯曲学校が各地に設置されました。

濱一衛の留学期は、「四大名旦」（四人の女形の名優、梅蘭芳・尚小雲・程硯秋・荀慧生）の活躍していた時代でした。

図2–1　「戯台全景」（『北京風俗図譜』東京：平凡社，1986）

図2–2　「楽器各種」（『北京風俗図譜』）

図2–3　四大名旦（1949年撮影、徐城北著，陳栄祥・施殿文訳『見て読む中国：京劇の世界』東京：東方書店，2006）

図2–4　芥川龍之介、1921年中国・大同の石仏前にて（『芥川龍之介全集』第８巻，東京：岩波書店，1996）

2.4. 日本での京劇公演

日本での京劇は、1918（大正８）年の梅蘭芳による東京公演が最初で、大正年間に６回の公演が行われました。しかし、昭和の戦前には一度の公演もなく、戦後になって1956（昭和31）年と1964（昭和39）年に来演され、1972(昭和47）年の日中国交回復後は様々な機会に京劇の公演が行われています。

2.5. 戦前中国の劇場

1921（大正10）年、芥川龍之介は大阪毎日新聞社より二ヶ月間、上海・北京等へ派遣された際に、中国の芝居を鑑賞しています。芥川の文章は、当時の劇場の様子をいきいきと伝えています。

> 序に芝居を見る順序を云えば、一等だろうが二等だろうが、ずんずん何処へでもはいってしまえば好い。支那では席を取った後、場代を払うのが慣例だから、その辺は甚軽便である。さて席が定まると、熱湯を通したタオルが来る、活版刷りの番附が来る。茶は勿論大土瓶が来る。その外西瓜の種だとか、一文菓子だとか云う物は、不要不要をきめてしまえば好い。(中略)
>
> 支那の芝居の特色は、まず鳴物の騒々しさが想像以上な所にある。(中略）実際私も慣れない内は、両手に耳を押えない限り、とても坐ってはいられなかった。(中略)
>
> その代わり支那の芝居にいれば、客席では話をしていようが、子供がわあわあ泣いていようが、格別苦にも何にもならない。これだけは至極便利である。或は支那の事だから、たとい見物が静かでなくとも、聴戯には差支えが起らないように、こんな鳴物が出来たのかも知れない。現に私なぞは一幕中、筋だの役者の名だの歌の意味だの、いろいろ村田君に教わっていたが、向う三軒両隣りの君子は、一度もうるさそうな顔をしなかった。
>
> 支那の芝居の第二の特色は、極端に道具を使わない事である。背景の如きも此処にはあるが、これは近頃の発明に過ぎない。支那本来の舞台の道具は、椅子と机と幕とだけである。(中略)
>
> 支那の芝居の第三の特色は、隈取りの変化が多い事である。(中略）その又隈取りも甚しいのは、赤だの藍だの代赭だのが、一面に皮膚を蔽っている。まず最初の感じから云うと、どうしても化粧とは思われない。私なぞは武松の芝居へ、蒋門神がのそのそ出て来た時には、いくら村田君の説明を聴いても、やはり仮面だとしか思われなかった。
>
> 支那の芝居の第四の特色は、立廻りが猛烈を極める事である。殊に下廻りの活動になると、これを役者と称するのは、軽業師と称するの当れるに若かない。彼等は舞台の端から端へ、続けさまに二度宙返りを打ったり、正面に積上げた机の上から、真っ倒に跳ね下りたりする。
>
> (芥川龍之介「上海游記」,『支那游記』 東京：改造社，1925；『芥川龍之介全集』 第８巻，東京：岩波書店，1996)
>
> (この節の記述は、加藤徹「京劇城」 http://www.geocities.jp/cato1963/KGJ.html を参照しました。)

３．濱文庫のコレクション

3.1. 濱文庫の京劇資料

3.1.1. 戯単

浜文庫／集181／1–134、
ほかに未整理68枚

濱文庫の中で最も貴重なものは、186枚にもおよぶ戯単（芝居番付）です。日本に所蔵される中国の古い戯単としては、名古屋大学附属図書館の青木文庫（青木正児の旧蔵書）に1925年から1928年までの戯単29枚があります。濱文庫の戯単は1934年から1939年までのもので、時代はやや下りますが、枚数では青木文庫をはるかにしのいでいます。

濱一衛自身の著書から、戯単について述べた箇所を見てみましょう。

> 何時だか華楽戯院かで前置きの芝居 ── 大体、座頭は最後の一にしか出演せず、その前の四五番は新進乃至二三流以下に委せてある。未熟の芸は辛いがその間に気分が出て来るのは仲々いゝ ── の外題、戯単子が配布されるのが遅かった為わからず、前後左右の人々に聞き合せたが誰方も御存知ない。彼等も誠に茫として楽しんで居る。
>
> (中丸均卿・濱一衛『北平的中国戯』東京：秋豊園，1936)

番付は戯単と申しますが、座席へ売りに回って来ますから買えばよいのです。これも以前は両大枚でしたが、今日では何倍もします。只今では活版か石版刷りですが、以前は木活の風雅なもので、つい七八年前迄は広和楼の番付がそれで、愉快なものでした。戯単について一寸お話ししましょう。

或は戯単子ともいいます。紅楼夢に見えている戯単は堂会の点戯(お客が好みの芝居を注文すること）の用に供せられたもので、それが劇場のボックスにのみ行われるようになり、劇場全体に行われるようになったのは光緒初年からといわれます。昔は当日の劇碼だけを順序通りに木刻或は木活で、黄色い長さ三四寸巾一寸位の劣等紙に印刷して、第四五番目の劇が上演される頃に売られます。二文位だったそうです。この外赤色の紙で、前記のより少し大きい位の戯単に戯碼を筆で書いたものを順次見せてゆきます、勿論心付けをするのです。それが光緒三十三年から、上海や天津の戯単にならって、赤黄緑等の色紙に活版刷りか石版刷りの戯目も演員の名もある今日のような戯単になりました、この新式戯単は第一舞台が最初で銅貨一枚で売っていたそうです。今日北京で行われているのは悉く新式のです。以前国劇博物館に戯単の蒐集がありましたが、色々蒐集している人が有るようです。

戯 単 の 見 方

1935年３月３日「華楽戯院」　浜文庫／集181／122

劇　場　名		
[住所]　上演（劇団名）時間　[住所]		
曜　日　　年　月　日		
予告 俳優名 俳優名 俳優名 演目名 解説	俳優名 演名目	俳優名 演名目 予告

文字の大きさと配置による、俳優のランク

俳優の格が上がるにつれて、「站(チャン)」(立つ)、「坐(ヅオ)」(腰かける)、「躺(タン)」(横になる) の順に文字の配置と大きさが変化します。

1．「站(チャン)」(立つ)：下位の俳優は、右端の「蕭盛萱」から「銭富川」まで、左側では「扎金奎」「徐霖甫」のように縦一列に配置します。

2．「坐(ヅオ)」(腰かける)：中位の俳優は、右端の「張雲溪」「袁世海」、左側の「尚富霞」「何雅秋」のように、姓を頂点に、二字の名を底辺にした三角形に配置します。

3．「躺(タン)」(横になる)：最高位の俳優「尚小雲」は右から左へ横並びに大きく書かれます。

5．おわりに

濱一衛が北京留学から帰国した一年後の1937（昭和12）年７月７日夜、北京の盧溝橋で日本軍が戦火を開き、北京は陥落します。以後、終戦まで北京は日本の支配下に置かれました。当時の様子を、奥野信太郎は次のように記しています。

> 盧溝橋の事件以来今日まで正に二十日間経過した。最初砲声を聞いた時には、ちょうどその前年豊台でも衝突事件があったので、その程度で収まることと誰もが多寡を括っていた。しかるに問題は必ずしも豊台事件のように簡単にはいかなかった。
>
> 事態は日一日と悪化してゆく。全市民悉く戒厳令下におかれることになった。午後十時以後の交通禁止が益々きびしくなって、忽ち日没と共に一切の交通絶対禁止となり、六時近く大通りを歩いていると、もう辻々には例の保安隊がすでに待機の状態で屯しているというありさまであった。(中略)
>
> このような物騒な折であるから、殆んど興行物も停止の感があったが、それでも砲声響く古城に住みながら、北京の人間に芝居だけは必須のものであったのか、富連成科班の演劇だけは前門外広和楼に於て上演が続けられていた。勿論夜間は無い。すべて白天戯（バイテンシイ）である。忘れもしない七月十五日わたくしもまた広和楼の観客の一人であった。戯院内の空気は概ねなごやかなもので、誰一人としてわたくしに白眼を向けるものとては無かった。「牡丹亭還魂記」の美しい夢の場面が緩やかな崑曲の笛の曲調と共にくり展べられてゆく。杜麗娘は李世芳が、柳夢梅は江世玉がそれぞれ扮して花間鍾情の妖しき物語を満喫させる。劉元彤・杜元田による「汾河湾」また熱演であった。劉の青衣（チンイ）ぶり、杜の堂々たる老生（ラオション）役、いざわが子の屍を汾河のほとりに急ぎ求めんと夫婦で蒼惶と退場する幕切れまで、些のたるみだに見せない演技に、満場拍手を惜しまないありさまであった。これが戯院の内外では情勢ががらりと変ってしまう。前門外はまた殊に熱閙の巷だけに厳戒も一層なものである。土嚢と保安隊、そして銃剣と埃だ。しかるに広和楼のなかには相変らず乾隆以来の空気が充満している。窓から落ちる日ざしのおだやかさ、胡弓の啜り泣きにとけあって人々の心をはかなく美しく古風に染めあげてゆく。富連成科班の芝居だけはかくの如くして毎日平静に続けられていった。観客は七八分の入りであった。
>
> (奥野信太郎「籠城前後」,『随筆北京』東京：第一書房，1940；東京：平凡社，1990)

図4–69　湖広会館の戯院（現在）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

展示会場のスペースの関係により、本図録に掲載されていても、展示されていないものがあります。どうぞご了承ください。

濱文庫所蔵の資料は、請求番号を記しました。請求番号を記さないものは、濱文庫以外の九州大学附属図書館（分館を含む）の資料です。以下の資料については、他大学より取り寄せました。各図書館のご厚意に感謝いたします。

○波多野乾一『支那劇と其名優』(東京：新作社，1925)
佐賀大学附属図書館

○中丸均卿・濱一衛『北平的中国戯』(東京：秋豊園，1936)
滋賀県立大学図書情報センター

○濱一衛・汪実棠『中国話教本　北京導游』(松山：松山高等商業学校，1939)
東京大学東洋文化研究所図書室

図4–22の写真掲載については、(財)禅文化研究所の許諾を得ました。

写真・図版の掲載にあたり、関係者を通じてできる限りの調査をしましたが、著作権者と連絡が取れないものもありました。お気づきの点はご一報いただければ幸いです。

本図録作成にあたり、以下の方々よりご教示をいただきました。謹んで謝意を表します。

落石清、久保智之、呉紅華、合山究、近藤ゆかり、周国龍、石汝傑、孫江、竹村則行、徳元美智子、中川諭、西山猛、西村正男、東英寿、松浦恒雄（五十音順、敬称略）

執筆分担

中里見敬：　1, 2, 3.1, 3.4, 4, 5
中尾友香梨：3.2, 3.3

■「借東風」　唱：馬連良

「老生」（立役）の代表として、馬連良が諸葛孔明に扮する「借東風」を聴いてみましょう。最近の映画「レッドクリフ」でもおなじみの、赤壁の戦いで諸葛孔明が東風を呼ぶ場面です。濱一衛は『支那芝居の話』の中で、馬連良を次のように評しています。

> *何といっても今日では老生の筆頭です。仕草は瀟灑（しょうしゃ）で、（中略）定評通り芝居は上手です。（中略）嗓子（のど）は昔に比して調門（ちょうし）も低くなっていますし、日毎に枯渋に趨くようですが反面花腔（ふしのあや）を多くして聴衆を喜ばせているようです。この人の新作は全部借東風（中略）のような古い劇に手を入れたものが多く、（中略）立派な役者顔を持っている（中略）当り芸は甘露寺、青風亭、借東風（以下、略）。*

■「覇王別姫」　唱：梅蘭芳

「旦」（女形）の代表はやはり梅蘭芳でしょう。映画「さらばわが愛：覇王別姫」で有名な京劇「覇王別姫」で、四面楚歌となった項羽に剣舞を披露し、別れを告げて自害する虞美人に扮した梅蘭芳を聴いてみましょう。濱一衛『支那芝居の話』では、梅蘭芳について次のように言っています。

> *近来での名優で四大名旦と並び称せられていても一寸格が違うようです。晩年太って来て、容姿に往年の美しさは認められませんでしたが、美しい眼、整った顔はそれでも他の追随を許しませんでした。それに天賦の美声は甘く丸くこれ亦無類のものでした。*

加藤徹「京劇城」より
http://www.geocities.jp/cato1963/KGZjdf.html ,
http://www.geocities.jp/cato1963/KGZbwbj.html

■「華容道」　唱：袁世海

京劇「華容道」は三国志の一段。映画「レッドクリフ」で曹操が敗れたのに続く場面。

赤壁で大敗を喫し、ほうほうのていで逃げ落ちた曹操は、ついに華容道で関羽に行く手を阻まれる。関羽はかつて曹操のもとで厚遇された恩義があり、曹操の哀願を聞くと、これを殺すに忍びず、義をもって逃す。

白い隈取りをしたのが曹操に扮した「浄」の袁世海。曹操の泣き、嘆くさまが見どころ。赤い顔は関羽。

濱一衛『支那芝居の話』から、袁世海に対する評を見てみましょう。

> *噯子（のと）は（裘）盛戎に及びませんが、台詞に魅力があり、背は低いが扮相もよく、特にこの人の眼がよい。今副浄で最も将来を嘱目されています。芝居の旨いことは戦宛城の踏青苗で定評があります。*

（謝辞）

講座で映写した図版のうち、九州大学附属図書館濱文庫の所蔵は以下のもので、使用の許諾を得た。九州大学附属図書館のご厚意に謝意を表したい。

- 濱一衛画「隈とり図」　（浜文庫／日文戯曲／21）
- 絵葉書『北平大観』第2輯, 1930年代(?)発行　（濱文庫／追(2008)／49）
- 絵葉書『北平大観』第3輯, 1930年代(?)発行　（濱文庫／追(2008)／49）
- 絵葉書『北平大観』第3輯, 1930年代(?)発行　（濱文庫／追(2008)／49）
- 絵葉書『北平大観』第2輯, 1930年代(?)発行　（濱文庫／追(2008)／49）
- 戯単　1931年8月25日　第一舞台　（浜文庫／集181／未整理）
- 戯単　1934年11月5日　慶楽戯院　（浜文庫／集181／112）
- 戯単　1935年10月14日　広和楼　（浜文庫／集181／3）
- 戯単　1936年2月12日 広和楼　（浜文庫／集181／80）
- 戯単　1939年2月22日　新新大戯院　（浜文庫／集181／未整理）
- 戯単　1936年5月3日　金城大戯院　（浜文庫／集181／44）
- 戯単　1935年3月3日　華楽戯院　（浜文庫／集181／122）
- 京劇のチケット　（浜文庫／集181／20）
- 『増補都門紀略』1879年刊（初版は1845年）（浜文庫／史7／1-10）より、計4葉